

C, つまり, *there* 構文の場所の副詞(句)との共起が見られるもののみに限ったことを合せ考えると, Chaucer における *there* 存在文は同時代のそれに比べて, 近代英語へと一歩近づいているということが言えるであろう。

(A. 5, 1) では目的語を伴った他動詞が見られ注目される。

また次の二例は、ここでの Type C の条件（場所の副詞(句)との共起）に欠けるが注目に値する。

This is to seyn that as longe is that day in that month, as was such a day in such a month; *there varieth but litel*. (A. II, 15, 6)

“Forsothe,” quod sche, “thanne nedeth ther somewhat that every man deriseth?” “Yee, *ther nedeth*,” quod I. (B. III, Pr. 3, 41)

この二例の文では、主語 NP が表出されず、*there* が、いわば動詞に対する prop word 的役割を果し、この語の主語的性格を例証するものと言えよう。

Sawyer によれば、現代英語では *there* 構文と、いわば裏表の関係にある、小論での Type A 構文をとる場合は具象名詞に限られるという²⁰⁾。この観点から手元のデータの Type A 構文に相当するものの主語 NP について調べてみると次表のようになる（判断に迷う中間的なものは除く。）

	ABI.	14C.	Chaucer
+ concrete	18	0	1
- concrete	18	3	4

この表から判断すると、A 型構文が Chaucer を含む 14 世紀散文で激減したとは云え、この観点から見ると、まだ現代英語に見られるような質的な分化の兆候は認め難い。

以上、13, 14 世紀の散文と比較しつつ、Chaucer の散文について、存在構文を三つの type に分けて見てきた。

まず、Type A に関しては、13 世紀散文では全体のほぼ 1/2 を占めていたのが、14 世紀のそれでは 16% へと激減している。この点、Chaucer でもほぼ同じ傾向を示し、12% となっている。それに対して、この Type A といわば競合関係にある Type C（つまり、*there* 構文）は 13 世紀の 3% に対して、14 世紀では 42% と急増している。Chaucer 散文では、これが実に 77% の高率に達する。

また、頻度数が突出して多い *Mandev.* は制作年代の上からも 15 世紀前半と考えられることもあり、その意味では Chaucer より後の時代になる。その故か、Type A は 2% 弱と極端に少い。一方、Type C は 38% で他の 14 世紀散文とほぼ同じ数字を示すが、その意味からも、Chaucer の Type C の数字、77% の大きさが目につくところであり、また、Type B が他のいずれに比べても極端に少く、Chaucer の *there* 構文の多用が注目される。そして、ここでは Type

And bytwixen thise two lettres *ther were seyn* degrees nobly ywrought
in manere of laddres. (B. I, Pr. 1, 34)

疑問詞による疑問文では現代英語と同じように語順転倒が起る。

Or elles what difference *is ther* bytwixe the prescience and thilke
japeworthi devynge of Tyresie the divynour...? (B. V, Pr. 3, 132)
what aggreable thynges is ther in tho dignytees or powers but oonly
the goodnesse of folk that usen hem? (B. II, Pr. 6, 22)

次の例においては、*there* 構文の中に組み込まれた助動詞と *there* との間に語順転倒が見られる。このことは、この文における *there* が文の主語的性格を滞っていることを感じさせる。

what difference thanne *may ther be* bytwixen that that God doth and
the hap of fortune... (B. IV, Pr. 5, 37)

なお現代英語で *there* の主語性を物語るものの一つとして ‘Let there be light!’ のような文をあげるが、Chaucer にも、たまたま次のような文が見られる。

Wherefore I pray yow, *let mercy been* in your heart. (M. 1866)

この文では *there* は見られず NP が直接、*let* の目的語の位置に来る形となっており、今見た現代英語の例に見られるような程度にまでは *there* 構文が熟成していないという見方も可能であろう。

また、be 動詞以外の動詞と *there* の結合も全部で 7 例見られる。

for he dide nevere synne, ne nevere *cam ther* a vileyns word out of his
mouth (M. 1502)

thorough which pyn *ther goth* a litel wegge. (A. 14. 4)

or elles as manye rychesses as *ther schynen* bryghte sterres in hevene
on the sterry nightes. (B. II, M2)

Overthwart this forseide longe lyne *ther crossith* him another lyne of
the same lengthe from eest to west. (A. 5, 1)

For ther nys nothyng in this world that he desireth, save oonly
worshipe and honour. (M.1761)

強調のためか、NP が文頭位に置かれた形も見られる。

and the moore deedly hate ther is among hem. (P.205)

しかも、この文では、definite NP が主語となっている。

これらのいわば基本形に対して、副詞(句)が文頭位に来ると通例、語順転倒を起す。

Thus ben there 6 degres of zodiak on that oo syde of the lyne and 6
degrees on that othir. (A. 21, 42)

Now been ther three maneres of humylitee in herte. (P.477)

algatis yit is ther comune necessite in that oon and in that othir.

(B. V. Pr. 3, 70)

Thanne arn ther the vertues of feith and hope in God and in his seintes
(P.733)

(P.733) の文でも definite NP の主語が見られるが、Type C 存在文において definite NP の主語を持つものは全体で2例のみである。

また同様に副詞(句)が文頭位にきた場合でも、語順転倒を起さないこともある。

For certes, in this world *ther is no wight* that may be conseilled...
(M. 1301)

For certes, in the werkyng of the deedly synne, *ther is no trust* to no
good werk... (P.239)

Over the whiche degrees *there ben noumbres of augrym* that dividen...
(A. 7. 6)

次の二文は受動態である。

in the entre or in the seler of Juppiter *ther ben cowched* two tonnes
(B. II, Pr. 2, 74)

そこで、*there* を含む存在文、つまり Type C に関しては、ここでは同一節内において *there* と場所の副詞(句)とが共起するもののみを考察の対象とする。

この *there* と場所の副詞(句)が共起する文は OE 散文の中にもすでに散見され、OE における *there* 存在構文の存在を示す OED の例証文にもその共起が見られる¹⁹⁾。

このような Type C の文は、13世紀の AB language ではわずかに 3 例(3%)に止まるが、14世紀散文では18例で全体の42%に達する。さらに統計上、別枠にした *Mandev.* では95例もの多きに達し、次例のように *there* そのものが共起する文さえ見られる。

And þere in more plentee of peple þere þan in ony oþer partie of
ynde... (*Mandev.* 135)

この文はまさに先にあげた現代英語の例に遜色ない、二種類の *there* が同一節内に共起する典型的な文となっている。このようなことから14世紀の散文においては、いわゆる *there* 存在文は確実にその地歩を固めたと考えられる。

そのような状況の中であって、Chaucer の散文では Type C、つまり *there* 存在文はどのような状態であるのかを次に見ていくことにする。

今回対象とした Chaucer の散文のデータの中で形態上、*there* を含む存在の全用例は214例で、そのうち *there* と場所の副詞(句)との共起が見られるものは、ほぼその2割強の51例見られ、これが小論で対象とする Chaucer における Type C 文ということになる。従って、前述の Type A 8 例、Type B 7 例を合わせて100とした比率は Type A が12%、Type B が11%であるのに対して、Type C は77%の高率に達する。以下、Chaucer 散文に見られる Type C 文を検討していくことにする。

次の文はその基本形とも言うべきパターンである。

Ther is noon oother name under hevene that is yeve to any man.
(P.286)

ther is also costlewe furringe in hir gownes. (P.418)

を指示、先導する副詞として用いられている。しかし、その場合は語順的にも相互に接近した位置にあるのが通例であり、また場所の副詞(句)の後に回ることはない、等の制約があり、*there* 構文の場合とやや趣きを異にする。

- 19) 例えば、OE 散文の *Orosius* に次のような文が見られ、これがいわゆる *there* 構文の OED での初出例でしかも OE では唯一の例となっている *þær is mid Estum an mægð*.

くパターンを重視するが¹³⁾、存在構文においても OE 期ではまさにこの Type B 構文がもっとも普通のパターンであった¹⁴⁾。

ME に入って13世紀の散文, AB language では先の Type A と同数の48.5% を占めている¹⁵⁾。14世紀散文では42% となっていて¹⁶⁾、大差はない。一方, Chaucer の散文ではこの Type の文は全部で7例と少く、全体の11%でその頻度の低さが目をひく。これは Chaucer の存在構成の三つのパターンの中でもっとも小さい数字となっている。

以下がその典型的な例文である。

Here nys no peril. (B. I, Pr. 2)
in hym nys noon imperfeccioun (P.1006)
but in helle in noon honour ne reverence. (P.232)

4. Type C (There+be+NP+Locative)

形態的な面から言えば、このパターンは OE でも決して稀なものではない。しかしながら、その多くは Type B に属する、副詞の *there* が文頭に置かれ語順転倒した動詞と主語が続く構文であると考えられる。

そもそも、*there* 存在文を考える場合、その *there* について、副詞の *there* との識別の困難さから生じる ambiguity の問題を避けることができない。このことは Breivik の大著においても言及され、その識別は主観的な判断によるものとしている。従って、その中で扱われた、いわゆる *there* 構文の *there* に関する統計的数字は ‘an illustration of general trends’ にすぎないと述べている¹⁷⁾。同様に、Nagashima においても *there* の判定に際し、‘ambiguous’ である旨のコメントが至るところに見られる。

そのような状況の中で、唯一、客観的判断の有力な基準となり得るであろうと思われるものがある。それは *there* が場所を表わす副詞(句) (Locative) と同一節内に現われる場合である。これは現代英語においても、しばしば、*there is* 構文の *there* が意味的には ‘empty’ であるという例証として、例えば ‘There’s a man there.’ といったような文が用いられることと同様である¹⁸⁾。

13) Cf. Breivik (1983), chapten 6.

14) Cf. R. Sugiyama, “The Origin of the Function Word *there*” *Bulletin of Kagoshima Prefectural Jr. College*, 20, 1969, p.126.

15) Cf. Sugiyama, 1983.

16) Cf. 杉山, 1985.

17) Breivik, 1983, p.275.

18) 言うまでもなく、これも絶対的なものではあり得ない。例えば、I sette ther a prikke at my fot (A. Sup. 42, 4) においては、*ther* は後置された場所の副詞句

めている⁹⁾。存在を表わす構文においても PE とは異って、この Type A のパターンは OE 期においては一般的なものであったが、やがて次に見る Type B と *there* 構文である Type C との競合を経て、現代英語に見られるような極めて特殊なコンテクストにのみ起るといった状態になった。

この Type A 構文は、例えば13世紀の散文、AB language では、まだ存在構文全体の48.5%を占めている¹⁰⁾。ところが、14世紀散文についての調査では16%、*Mandev.*を含んだ場合は4%と低い割合となり¹¹⁾、いずれにしても、13世紀から14世紀にかけてのこの Type A 構文の大幅な減少が顕著である。限られたコーパスに基くこれらの数字は、そのまま受けとるには不十分であるが、あとに見る Type C 構文の急増と合わせ考える時、この時期に大きく変動したことは間違いない¹²⁾。

そこで同じ時代の Chaucer の場合はどうであろうか。Type A に分類される存在文は全部で8例見られるが、これは全体の12%にあたり、上述の Chaucer を除く14世紀散文の数字16%とはほぼ同じである。以下に例をあげる。

Some lesynge is of which ther comth noon advantage to no wight
(P.607)

Salvacion of thynges is where as ther been manye conseilours.
(M.1170)

If that we seyn that we be withoute synne, we deceyve us selve, and
trouthe is not in us. (P.348)

But yif so be that *noon uncertein thing ne mai ben* in hym...
(B. V. Pr. 3)

Now been ther three maneres of humylitee in herte; *another humylitee*
is in his mouth; (P.477)

3. Type B (Adverbials+be+NP)

これは現代英語でも副詞（句）が文頭位に来ることによる inversion の型として一般的に見られる構文である。*there* 構文の発達を考える上で Breivik は OE における 'verb-second' の傾向、即ち、'topical element' を文頭に動詞が続

9) W. H. Brown Jr. *A Syntax of King Alfred's Pastoral Care*, Mouton, 1970. The Hague Paris, p.37.

10) Cf. R. Sugiyama, 1983.

11) Cf. 杉山隆一, 1985.

12) 韻文を含んだ Breivik (1983) でも13世紀から14世紀にかけて、他のパターンの減少に対して *there* 構文の急増が見られる。

にする目的から、散文のみを考察の対象とする⁷⁾。

また、there 存在分の考察を進めるに当たって、次の三つの文型を基本形とし、それぞれ Type A, B, C とする。

Type A: NP+be

Type B: Adverbials+be+NP

Type C: There+be+NP+Locative

Nagashima ではこの Type A と Type B の構文を、いわゆる存在の there と共起する文（小論では Type C）との対比において、PE に即してあるべき there を欠く構造と考え同一範疇にくくるが、これは妥当ではない。Adverbials が文頭に来ることが there の有無に影響を与える可能性を否定できないとすれば、Type B はむしろ、Type C (Nagashima では +Locative の限定はなし) に近づく。従って Type B 構文は A, C に対して等距離にあると考えるのが妥当であろう。

まず、これら三パターンの頻度を見てみると次のようになる。なお、比較のために別に調査した13世紀、14世紀散文についての数字を合わせて表示する⁸⁾。

	13C (AB lang)	14C	<i>Mandev.</i>	Chaucer
Type A	48.5% (47)	16% (7)	2% (5)	12% (8)
Type B	48.5% (47)	42% (18)	60%(153)	11% (7)
Type C	3 % (3)	42% (18)	38% (95)	77% (51)

(括弧内の数字は実数)

2. Type A (NP+be)

一般に語順が比較的自由であったといわれる OE においても、「主語＋述語」の語順は一般的であり、例えば、Alfred の散文、*Pastoral Care* では主語が動詞に先行するパターンは SV を含む clause に限って見れば、全体の87%を占

7) 対象とした作品並びにテキストは L.D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer* (3rd ed.), Houghton Mifflin Company, Boston, 1987 中の The Tale of Melibee (M), The Parsons's Tale (P), A Treatise on the Astrolabe (A), Boece (B) である（末尾の文字は小論での略記）。

8) 対象とした作品は次の通りである。13世紀: *Ancrene Wisse*, *Hali Meidenhad*, *Seinte Marherete*, *De Liflade ant te Passiun of Seinte Iulienne*, *The Life of Saint Katherine*, *Sawles Warde*. 14世紀: *The Cloud of Unknowing*, *English Prose Treatises of Richard Rolle de Hampole*, *A Book of London English 1384-1425*, *Mandeville's Travels*. なお、使用テキストその他の詳細は、14世紀に関しては杉山隆一「十四世紀英語散文における Per 存在文」『文芸と思想』No.49, 1985, pp.1-16. 13世紀に関しては、R. Sugiyama, "Existential There in AB Language"『英語学研究——松浪有博士還暦記念論文集』, 1983, 秀文インターナショナル, pp.184-197. を参照。表中、*Mandev.* は頻度数が極端に多く、14世紀の他の散文の数字に大きく影響するために別枠にした。

チョーサー散文における *there* 存在文*

杉 山 隆 一

1. 特異な構造を持つ *there*¹⁾ 存在文の成立過程を跡づける実証的研究はまだ必ずしも充分とは言えない。Quirk (1951)²⁾ 以来、すでに OE にこの構文の存在を認めるのが通説となっているが、その *there* の内容に関して細かく見れば事はそう単純ではない。しかしながら、近代英語初期にはこの構文はほぼ確立されたと見てよいであろう³⁾。このようなことから、その発達過程を見ると、ME がその主舞台となる。小論では ME 後期の代表的存在である Chaucer の散文に関して考察を試みる。

Chaucer における *there* 存在文の研究は Nagashima (1976)⁴⁾ があり、また Breivik (1983)⁵⁾ でもその一部に言及が見られるが、いずれも韻文と散文を等しく含み、しかも作品の全部が網羅されているわけではない。特に *there* 存在文を考えると、韻文と散文の違いは大きい。*there* 存在文の考察では語順、そして *there* の有無が中心的論点であることから、韻文における韻の制約が直接に関ってくることを考えるとき、韻文における用例は散文のそれとは俊別されねばならないし⁶⁾、また、両者の表面的な比較は歪みを生ずることになる。つまり、韻文は文学的技巧がより強く加わったものであり、少くともその分、散文はより自然言語に近いと考えられよう。小論では、できるだけ論点を鮮明

* 本稿は日本英文学会第40回九州支部大会のシンポジウムで発表したものを加筆、修正したものである。

- 1) 小論においては *there* は特に断らない限り、副詞の *there* と対比される存在構文の *there* を指す。
- 2) R. Quirk, "Expletive or Existential *there*" *London Medieval Studies* vol. III, Pt. 1, p.32.
- 3) Cf. "The Function Word *there* in Shakespeare" 『文芸と思想』No.39, 1975, pp.1-13.
- 4) D. Nagashima, "A Historical Study of the Introductory *There*, Pt. II, The Middle English Period" *Studies in Foreign Languages and Literatures* 2, pp.103-132.
- 5) L. E. Breivik, *Existential There, A Synchronic and Diachronic Study*, Univ. of Bergen.
- 6) 現に Nagashima (1976) では一つの特異な語順転到形 (NP + *there* + *be*) が韻文のみしか現れないという指摘がある。pp.127-8.